令和８年度　熊本県立大学　総合管理学部　総合管理学科
一般選抜試験問題（後期日程）　小論文　解答例

問題１

（１）3 つの項目：精神的健康、身体的健康、技能
順位が前回調査から変わらなかった項目：身体的健康

（２）・COVID-19 のパンデミックによる学校閉鎖期間が短期間に収まったこと
・子育て世帯の経済状況が改善したこと

（３）①　3 つの項目すべてにおいて上位 3 分の 1 に位置している。
②　技能は上位 3 分の 1 に位置するが､精神的健康は下位 3 分の 1 に位置している。

問題２

（１）孤独感が「全くない」「ほとんどない」と回答した人の割合は、性別では男性 80.9%女性 71.2%であり、男性が女性を約 10 ポイント上回っている。また、年齢別に見ると、この割合は年齢があがるにつれて減少する傾向がみられる。特に 10 歳と 14 歳の回答者を比較すると 18.5 ポイントの差がある。（133 文字）

（２）「安心できる場所になっている」に肯定的な回答をした者の割合は約半数程度で、学校と同じ水準である。しかし、「相談できる人がいる」と「助けてくれる人がいる」に肯定的な回答をした者の割合は、インターネット空間に次いで低い水準に留まっている。具体的には、「相談できる人がいる」は 16.5%で、インターネット空間 13.5%とほとんど差がなく、「助けてくれる人がいる」は 33.7%で学校 76.1%の半分も満たない結果となっている。(196 文字)

問題３

（１）　十人十色　（千差万別、三者三様、多種多様）

（２）　(B) 小耳
(C) 拍子
(D) 視界

（３）　世の中は多様な個性を持つ人たちでできているので、クラスに色んな個性があった方がよい。

（４）　個人の自由を尊重し、開放的で多様性を重視している。

問題４

（解答例１）

私は、日本の子どもの幸福度を向上させるための取り組みとして、学校における生徒間のピア相談・支援活動を提案する。この活動は、全学年を対象に、生徒同士が互いの悩みを傾聴し情報提供を行い、必要に応じて専門機関等へつなぐ相互支援である。この活動を実施する際は、教員や専門職による精神的健康、傾聴スキル、連携方法等に関する研修を受講する。

この活動を提案した理由は以下の 3 点である。第１に、資料１－２より、日本の子どもの幸福度を下げている主要因は精神的健康の低さにあるため、精神的健康へ介入する必要がある。第２に、資料２－１より、年齢の上昇に伴って孤独感を抱える生徒の割合が増加する傾向にあるため、特に中学生以上でこの活動の効果が高まると考える。第３に、資料２－２より、学校に対する肯定的な回答は、「安心できる場所になっている」が 49.9%、「相談できる人がいる」が 65.7%、「助けてくれる人がいる」が 76.1%であり、学校が全ての生徒に対し、十分な支援を提供できているとは言い難い現状を見ることができる。

学校全体でこの活動に取り組むことで、同世代間の相互支援が機能し、生徒の日常的な孤独感を軽減できる。さらに、相談を受けた生徒が悩みの初期段階で異変を察知し、専門機関等につなぐことで、深刻な状況を未然に防ぐことも可能となる。この取り組みは、子どもの精神的健康に直接的に介入し、日本の子どもの幸福度を向上させると考える。（594 文字）

（解答例２）

私は、日本の子どもの幸福度を向上させるための取り組みとして、若者が中心となった多世代交流の場を地域に創造することを提案する。これは、資料３の中学や高校卒業後に同世代でグループをつくり、相互扶助や奉仕活動をしている地域があることから着想を得た。

現在、中高校生は学校や部活、塾などが中心の生活をしており、地域とのつながりが希薄化している。この現状を克服するためには、若者グループが主体となり、地域住民と協力して、子どもや若者の交流や社会奉仕の機会を増やすことが効果的だと考える。特に、資料２－２が示すとおり、地域において「相談できる人がいる」（16.5%）や「助けてくれる人がいる」（33.7%）の割合は低く、地域でのサポート機能の弱さが深刻である。資料３のような、個人の自由を尊重し、開放的で多様性を重視するコミュニティを意図的につくることで、この機能不全を補完し得る。また、子どもたちは、学校外に信頼できる相談相手や頼れる大人を見つけられる「第三の居場所」も獲得できる。

多様な価値観とサポートが得られるこの第三の居場所を提供することで、子どもの孤独感は緩和され、精神的健康が向上する。地域全体で子どもと若者を支える新しい仕組みの構築は、結果として子どもの幸福度を大きく向上させると考える。（538 文字）